

安息のない安息日（ルカ 13:10-17）

人々は、何かがうまくいかないときに、つい誰かのせいにしたたり、何かのせいにして、人生は空回りして前に進めなくなってしまう。それは嘘ではないかもしれませんが、しかし、信者の私たちは、そこで人間に絶対必要な安息がもしもあれば話は変わるだろうという目ですべてを見ないといいません。その人に、人間に絶対必要な、人間だけに許されている安息、安らぎが何か分かって、それを持っているとすれば、話は違うのではないのでしょうか。言葉を変えますと、何かのせい、誰かのせいになっていることは嘘ではないけれども、正解ではありません。その人の内側に、人間に絶対必要な安息が欠けていると、その裏返し、その表れが誰かのせい、何かのせいになるということを経験した人は覚えていないといけません。その絶対必要な安らぎというのはどこにあるのでしょうか。どうやって得られるのでしょうか。私たち信者がその奥義がわかって、それを自分のものとして味わっていなければ、世の中に希望などはありません。そのために神様は惨めな私たちを召されて祝福されました。信者であるにもかかわらず、安息とは程遠い人生を歩いている人が少なくありません。安息は、創造主の神様が世界万物を造られて、最後に人間だけは特別な神のかたちに造られました。つまり、人間だけが、神様がともにおられることができる霊的な存在として造られたわけです。それで、その創造の働きがすべて終わったときに、その次の日を安息日と命名されたわけです。つまり、安息日、安息ということは、神様がともにおられる神のかたちである人間だけに許されている特権なのです。犬や猫のような動物には安息という概念は存在しません。神様がともにおられ、その神様を信じる信仰を持つようになるので、そこで生まれるものが安息です。なので、安息日というのは、人間に向かって神様ご自身がいつまでもあなたがたと一緒になんだよということの宣言のようなものです。だから、あなたがたは安息のうちに生めよ、増えよ、地を満たせよ、この祝福を走ることになるよという意味合いをもって安息日を命名されたわけです。しかし、ご存知のように、目に見えない悪魔サタンに騙されて、神様との約束を破って罪を犯してしまいます。その瞬間、神様が人間から離れて、その代わりに悪魔サタンが人間の中に入って人を支配することになりました。当然ながら、その瞬間から安息というものは存在しなくなり、すべての安息を奪われることになってしまいます。安息のない人間は、実は人間ではありません。人間らしく生きるということは端から無理なのです。神様がともにおられることによる、それを信じることによって生まれるものが安息です。神様抜きで安息ということはありません。だから神様は、罪を犯して、悪魔に騙されて、安息を失ってしまい、苦しみの中、地獄に行くしかない人間を憐み、安息を取り戻すことを約束されます。それが創世記 3 章 15 節なのです。女の子孫が生まれて、蛇の頭を踏み砕くことによって、あなたがたが失ってしまった、奪われてしまったその安息を取り戻すことができるよということを経験されて、モーセの時代にこのことを律法に明記することによって、永遠に忘れてはいけませんと安息日を改めて命じられたわけです。つまり、安息日は、罪によって奪われてしまったその安息を、女の子孫、キリストによって悪魔の頭を踏み砕いて、それでまた取り戻されるものなんだよ。女の子孫、約束のメシアによってのみ安息は取り戻されるもの、得られるものなんだよ、この約束を忘れてはいけないという意味で、安息日をモーセの時代、律法に明記して命じられたわけです。これが安息日です。なのに、イスラエルの人々は安息日のことを誤解して、キリストが全く抜けたまま安息日を守ろうとうしました。それがずっと流れていて、今の聖書を見ますと、イスラエルの人、特にパリサイ人、神様を正しく信じて律法を徹底的に守ろうとしている人々から見られる現象なのです。彼らは悪い思いでふざけているわけではありません。神様のために命を懸けて、神のみことばを命がけで守るつもりなのですが、安息日が何か勘違いして誤解しているのです。そこにイエス様が現れて、安息日に 18 年間悪霊に取り憑かれて腰が曲がっている女の人を癒されました。安息日に仕事をしてはいけないルールがあるのに、そのルールを

破ったということで憤っている場面なのです。それに対してイエス様が、あなたがたは安息日に牛や羊などに水を飲ませているでしょう。サタンに捕らわれているたましいをそこから解放させることのどこが悪いのか。これこそが安息日ではないのかということをおっしゃっているわけです。多くのクリスチャンが、また、教会でもキリストが抜けている礼拝、キリストが抜けている祈り、献身、極めつきはキリストが抜けている伝道もあります。それで私たちの神様に忠実に仕えているとみな勘違いしているのです。また、何かがうまくいかないときには、ついつい律法的に物事を考えてしまいます。二点、三点空回りするしかありません。今日礼拝を捧げているレムナント教会の皆さんは、世界最低のキリスト教の人口の割合を持っているこの日本の地に生まれてクリスチャンになったことをこれから感謝して、最悪の条件で今もキリストが、初代教会にありました聖書的ないのちの運動を行っていらっしゃることを私たちが体験して、今もその通りに行われてることを日本の総会の教会、日本の現地の教会にそのことをおあかしすること、それで日本の教会が世界最低ではなくて、5000 種族に宣教する教会として力を持って立ち上がるように、それに仕えるために聖書的な伝道の運動、復活のキリストが今もなさっていらっしゃる世界福音化のための神の願いを全うするための神様のやり方、それを身をもって体験して、それを伝えていくということがレムナント教会のミッションであり、使命なのです。そのために安息日が何か。そのためにいちばん大切な、世の中では得られない、神から与えられる安息の主人公になること、神様はそのような祝福を備えて礼拝に招いていらっしゃることをぜひ覚えて、耳を傾けていただきたいと思います。

それで、今日の聖書を通して、私たちはいくつかのことを確認して心に留めないといけません。

1. キリストが抜けた安息日に真の安息はない。

その第 1、キリストが抜けてしまった安息日に真の安息は存在しません。人間に絶対に必要な安息は得られないということです。

1) 安息日をよく守ることで - 信仰ではなく

キリストが抜けた安息日では、どのようにして安息を得ようと頑張るのかと言いますと、キリストが抜けてしまったので、安息日をよく守ることで安息が得られると勘違いするわけです。日曜日に礼拝に来られないのは別の話であって、礼拝に来たとしても、日曜日に礼拝にきちんと行くから恵みがあるだろうという発想と同じなのです。

①より多くのルール

キリストを抜きにして、私たちが日曜日の礼拝というルールをしっかりと守るから、そこに神の安らぎと恵みが与えられるわけではありません。キリストが抜けてしまった安息日の場合には、安息日をよく守ることで安息に預かるというように勘違いするようになります。安息はキリストを信じる信仰によって与えられるものなのに、信じようとはしないで、何か守ることで与えられると勘違いするので、より多くの規則、ルールを作ることになります。守るから安らぎが得られるので、細かく細分化して、時間的にもこの時間まで、距離的にもどこまでが安息日に動ける距離なのか、仕事をしてはいけないと言われているが、どこまでが仕事なのか、いろいろきめ細かくルールを決めて、そうすることが神様を正しく信じることであり、またそれをすればするほど、細かくやればやるほど安らぎが得られると思っていたわけです。

②より徹底的に

なので、そのルールをより徹底的に守ろうじゃないか、徹底的になればなるほど安息に近づける思っていたし、

③より厳格に

だから、より厳しく厳格に守ろうじゃないかいうことになってしまいました。本当にそうなのでしょ
うか。残念ながら、日曜日に礼拝のために教会に来る人の中にも、このような発想の人が少なく
ありません。だから、礼拝が長く続かないし、礼拝そのものが負担になる場合もあります。礼拝は
負担ではありません。規則を守ることでもありません。ああ、そうか、だから礼拝はどうでもいい
のか。これは論外です。イスラエルの人たちが、キリストが抜けたまま安息日を守ろうとしたの
で、どうなってしまったのかいうことをよく見ないといけません。

2) 安息のないルール化-いのちではなく

なので、結局、安息日は真の安息はないままルール化されてしまいます。別の言葉では宗教化され
るとも言えるし、行政化されるわけです。そのようになるので、そこに安息などは期待できませ
ん。安息はルールではありません。キリストによって与えられるいのちによって得られるものであ
って、そのいのちとは全く関係ないままルール化されてしまうのです。

①思想づくり

結局はこうに流れると、安息日そのものが一つの思想になります。一つのイデオロギーになる
わけです。

②宗教づくり

思想づくりに走ることで、結局は一つの宗教になってしまいます。

③伝統づくり

だから、宗教作りに走ることで、それが伝統になり、伝統作りに走ることで、思想や
宗教、伝統というものは福音とは全く関係ないものです。誰がこうに神様から与えられている
安息日を思想にすり替え、宗教にすり替え、伝統にすり替えるのでしょうか。目に見えない悪魔サ
タンが作り出したサタンの作品なのです。見事にユダヤ人はサタンにやられているわけです。これ
がサタンによる作品なので、彼らは1ミリもそういうことを夢にも思っていなかったでしょうけれ
ども、実は暗闇の作品なのです。安息日は神から与えられている命令なのです。しかし、それがい
つの間にか悪魔の作品にすり替わっているということに気づかなければなりません。キリスト教、
聖書に出てくる言葉、概念そのものが、同じ単語が使われていても、あれが悪魔の作品にすり替わ
る可能性はいくらでもあるということに気づかなければなりません。だから教会は混乱してしま
い、分裂してしまい、結局は潰れて消えてなくなるようになります。この世の中に宗教はいりませ
ん。悪魔はそういうものをいっぱい作り出して、教会の中でもそのようなものを作り出して、とに
かく福音が広まらないように邪魔しようとしているのです。

3) 安息のない安息日は福音と正面衝突（怒り）

そういうことなので、結局、安息のない安息日、キリストが抜けている安息日は福音と正面からぶ
つかるようになります。このような現象を皆さん見たことないのでしょうか。教会で本当の意味で
福音が純粋に語られたときに、怒りを覚えて教会から出ていく人がいるのです。今まで自分が守っ
てきたユダヤ人と同じような感覚と真正面からぶつかるので、今日の聖書に出てくる憤って、とい
うことと同じ現象なのです。それが大きな団体のレベルでもそういうことが起きるわけです。なぜ
私たちに石を投げるのでしょうか。さまざまな口実があるのですが、本音の方が今日の聖書に出て
くる律法学者が憤っているその内容と同じ内容なのです。彼らはキリストが抜けた安息日、ルール
にこだわっているのに、それを破っているかのように映るから憤って怒って、裏返しますと、私に
はキリストがないよと叫んでいることと同じことなのです。それを世の中のメディアの力を借り

て、さまざまな通路を借りて攻撃するわけです。でも、もう構いません。わかっているから。キリストが抜けた安息日、本当に恐ろしい言葉ではないでしょうか。安息日、神のみことばなのです。それが悪魔の作品にすり替わると、本当にそういうことがありうると思っていらっしゃるのでしょうか。

4) 偽善者たち(ヨハネ 8:44)

今日の聖書を見ますと、見事に聖書にはそのことが書かれています。だから、イエス様は彼らに向かって偽善者たちとおっしゃいました。前にも申し上げましたように、偽善者というのは、嘘をつく、そういう単純な話ではなくて、キリストしか答えがないのに、キリストのほかに違うもので包装しているものを偽善と言います。いくらその人が善良な心優しい人間であっても、キリストが抜けたままその善良さでアピールしようとする、それは神様からご覧になりますと、偽善者にあたるわけです。キリストが抜けたまま安息日というルールをかぶっている彼らに向かって「偽善者たち」と。なぜそれが偽善者でしょうか。ヨハネ 8:44 には、あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であり、悪魔は初めから人殺しであり、偽りのものであり、偽りの父であると。だから、彼らは自分なりには神様に忠実に仕えるつもりで、神のみことばを徹底的に守るつもりなのですが、それがサタンのしわざになるわけです。だから「偽善者たち、あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者である」と言われるものになるわけです。安息日を徹底的に守っている人に向かって、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者である」とおっしゃっているのです。恐ろしい話なのです。残念ながら、教会の中にもそう言われても仕方がない方が結構いらっしゃるわけです。神のみことばがその人に刺さって、悔い改めて、キリストを信じないといけません。キリストが抜けた安息日なので、安息日がそうであれば、ほかにどういうものでも、キリストが抜けたものは全部偽善になるわけです。そこに正解も喜びも安息も希望なども存在しません。

今日礼拝を捧げている皆さんが、このことを正しく悟って、なるほどになれば、日本の総会に、日本の現地の教会に、聖書的なマルコのタラップンで行われていたキリストのわざを体験して、それを伝える使命に用いられることになるわけです。そのためにまず私たちが整えられないといけないのです。私たちがマルコのタラップンの集中に導かれるように、内側から整えられないといけないわけです。そのためにこの礼拝があり、またそうなればそのときから礼拝が変わります。礼拝が本当に御座のキャンプに変わります。私は信じます。なぜなら世界福音化を主がなしていらっしゃるわけですから。それと私たちとが無関係のものであれば、私たちはなんとかかわいそうな信者でしょうか。そんなことはありません。いま皆さんが経験していらっしゃるその困難、痛み、その険しい状況というのは、最高のチャンスなのです。だからこそマルコのタラップンの体験ができる最高の材料なのです。すべてに余裕があるところでは、マルコのタラップンもありません。そこは死を覚悟して、死ぬことも乗り越えた、その絶対価値を持っている人たちが集まりました。キリストで十分だと、いま死んでも構わない。そのようになるべきなのに、キリストが抜けた礼拝、キリストが抜けた安息日、キリストが抜けた聖日。そのどこが聖日でしょうか。そこを正さないといけません。

2. 安息のない安息日は苦しみの中にいる人々を助けることができない。

その結果、当たり前のことでしょけれども、安息のない安息日、キリストが抜けた安息日は、今、苦しみの中にいる人々を助けることなど不可能なのです。それが今日の聖書からも垣間見られるのではないのでしょうか。

1) 苦しみの中で

いま人々は実は苦しみの中にいるのです。今日の聖書に出ている 18 年間、腰が曲がっていた女性の場合は、一つの例に過ぎないもの、しかも表に目立つように表れているだけであって、世の中のすべての人が苦しみの中にいるということが見えてこないといけません。なぜなのでしょう。今日の腰が曲がっている女性に向かって、イエス様が正確に診断しておっしゃっています。

①サタンに縛られて

18 年間、サタンに縛られてと。みな神様を離れて、自分では気づいていないでしょうけれども、それで誰かのせい、何かのせい、うっ憤が溜まっていろいろ走り出してはいるけれども、実は悪魔サタンに縛られているので苦しむしかありません。その悪魔、サタンの使いである諸々の悪霊につかれることなので、苦しむしかありません。

②病気の霊につかれて

その人は親のせいで苦しんでいる。病のせいで苦しんでいる。社会がこうだ、会社がこうだ、制度がこうだ、それで苦しんでいると、いろいろなことを言うかもしれませんが、苦しみの霊につかれているから苦しんでるわけです。その苦しみの霊が病を引き起こす場合もあるし、その人の考え方の中に入り込むと精神的に困難させる場合もあるし、基本的に考え方が神様を離れて、信仰とは無関係の考えに囚われるように悪霊が働いているので、みな苦しみしかありません。神様を離れている人々は、一人も例外なく苦しむようになります。

③束縛

そして、その苦しみから自分でいくら頑張っても抜け出すことはできません。周りからいくら助けようとしても、そこから解放されることはできません。だからイエス様は束縛という言葉を使いました。運命に捕らわれているわけです。苦しむしかない運命に捕らわれているのです。これが人々の苦しみです。精神的に病んでる人のいちばん厄介なことは、この話が聞こえないのです。誰かに裏切られた、親にやられた、そのことしか見えないのです。悪魔がその人の精神を捕えて、この話が見えないように聞こえないように誘い込む霊によって精神を縛って働いてるからこれが聞こえないのです。いつまで経っても、自分の過去の不幸が誰かのせい、何かのせいなのです。人間の苦しみは誰かのせいではありません。悪魔サタンに縛られて、悪魔の使い、悪霊につかれた結果、苦しみの運命に束縛されているので、それでみな苦しんでいるわけです。形がいろいろ違うだけなのです。また、それが表に現れる時刻表が異なっているだけなのです。

2) 人生の絶対必要 - 安息

なので、何が苦しみなのかが本当にわかっていれば、人間に絶対必要なのは安息なのです。

①創世記 3:15

人間に絶対必要なのは、苦しみから解放されるために悪魔の頭を踏み砕いて勝利すること。女の子孫が生まれて蛇の頭を踏み砕く、そこにのみ安息があるわけです。ロトに当たるから安らぎが与えられるのではなくて、性格が合わない奥さんが急に性格が変わって優しくなるから安息が得られるとみな勘違いしているのですが、そこに安息はありません。悪魔の頭が踏み砕かれない限り、人間に安息はありません。

②出エジプト 3:18

それから、エジプトから羊の地によって解放されたように、暗闇とのろいの運命、勢力から完全に解放されること、そこにのみ安息があります。お金がない者にお金が入ってくると安らぎになると勘違いしているのですが、それは安らぎではありません。一時的な紛らわしいものなのです。クリ

スチャンがこのことがわかっていないので、クリスチャンとしての祝福の門が延期されるわけです。これが人間に必要なものなのです。

③イザヤ 7:14

悪魔の頭が踏み砕かれて、暗闇の勢力から解放されて、処女が身ごもって子どもを産む。その名をインマヌエルと言います。神が私たちとともにおられる。神様と出会い、神様と一緒にいること、そこにのみ安息があります。神様を抜きにして状況が変わるから、変わるから安らぎを得られるということは言語道断なのです。世の中で言ってることなのです。本当の安らぎはそこにはありません。未だに皆さんが心の中でこのことのゆえに、あの人のゆえにという思いがあれば、全部が悪魔の偽りなのです。目を開いて、聖書が言っている本当のことに目が開かれないといけません。この悪魔の頭を踏み砕いて、暗闇の勢力から解放され、神様と出会うことができる、これを完璧に成し遂げられた方がキリストであり、それを成し遂げられる方がキリストであり、それを実際に成し遂げられた方がイエス様なのです。イエスはキリストなのです。だからキリストにのみ安息があるわけです。なのに、そのキリストを抜きにして安息日を守ろうとしていることは、なんと愚かなことでしょうか。愚かで終わればいいけれども、恐ろしいことに悪魔の作品になるわけです。

3) 現場に対する無関心と無能力

なので、キリストのない、安息のない安息日は、苦しみの中にいる人々を当然ながら助けることができないし、なので現場に対して関心を持つことができません。イスラエルは、彼らは選民で、他は全部異邦人で、滅びて当然だと思っていました。教会でも同じなのです。教会に集まり、ハレルヤと賛美はして、みな仲良くしようということはあるかもしれませんが、現場に対しての重荷、祈りなどは実はありえないのです。祈っているかもしれませんが。形式的に。でも、実際にはキリストが抜けているので、現場がどういう状態で、なぜ人々が苦しんでいるのか、本当のことがわかっていないので、祈っていても祈りは次元が違うものになります。現場に無関心であり、実は無能力で無気力になるしかありません。キリストが抜けている安息日、安息のない安息日というものは、現場を見たとしても、世の中の人と同じ目線でうわべばかりを見ていて、その内側のたましいを見る目が開かれていないので、現場のための祈りなどは成り立たないのです。皆さんの現場の人々や家族を見るときにうわべばかりを見ているのではないのでしょうか。たましいを見ないと。たましいは、現場で人を殺した人間でも、人殺しが見えるのではなくて、たましいが見えるので、私と同じ人間なのです。私が人を殺したことがないだけであって、いつでも人を殺せるものなのです。根本的に同じ人間ではないのでしょうか。だから、彼らを受け入れて、キリストを伝えることができるわけです。彼らに必要なのは、法律や人の許しではなくて、キリストが必要なのです。癌にかかっている人と健康な私と違うのでしょうか。癌ではなくて、その裏側にあるその人が癌になるしかないたましいの状態を見るので、ならば私と同じではないのでしょうか。その人にはキリストが必要で、私には人を殺した経験がないからキリストがいらないのでしょうか。あるいは、キリストが勘違いしている安息日程度の軽いキリストになってしまうのでしょうか。それはキリスト教会ではありません。私にもキリストでないと絶対いけない理由があるわけです。二部礼拝でそのことをもう少し詳しく申し上げます。

4) マタイ 11:28、ルカ 6:5、ヘブライ 4:10

だから、キリストによる真の安息が何かわかっている人は、それを安息のない絶望から安息を味わっている者が、それをおあかしして伝えることができるし、伝えようという思いで現場を見るわけです。現場を見てください。お金のある人もない人も、学歴のある人もない人も、犯罪者でも警察の人でも、みなたましいが死んでいて、悪魔に捕らわれて、安息のないままサタンの12の策略に捕らわれてもがいていることが見えないのでしょうか。彼らに必要なのは、行政でもなく、医学で

もなく、教育でもなく、キリストが必要なのです。それが見えないのは、私たちもキリストが抜けている礼拝を捧げているのかもしれませんが。キリストが抜けている信仰告白をしているのかもしれませんが。もちろんイエスはキリストですよと告白しているでしょうけれども。なぜ皆さんにキリストが必要なのでしょうか。皆さんの家庭の平和のために、皆さんが抱えてるその問題の解決のために、病気が治ることのために、子どもがこれから頑張る良い人になるために、それでキリストが必要なのでしょうか。だからキリストが抜けているキリストになるわけです。それはキリストではありません。キリストは、私たちが悩んでいる問題の解決のための十字架で死なれたわけではありません。もし私が悪魔の子でなければ、私にキリストはいらないでしょう。キリストが私のために十字架で血を流す理由がどこなのでしょう。どれほど悪いことしたのでしょうか。その悪いことのために十字架で死なれたわけではありません。その悪いことの10億倍以上、ひどい罪を持っているからなのです。自分が罪人だということを認めない限りはキリストは抜けているのです。いくらイエスはキリストと賛美をしても。そこからスタートなのです。そこからなのです。キリスト教と他の宗教との差別化ができていないといけません。何が違うのかが。

それで、そのキリストであるイエス様が、苦しんでいる人々にこのように呼びかけていらっしゃいます。「そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です」。キリストこそ安息日の主だ。ヘブル4:10には、「神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです」。キリストによって本当の安息に入っている者は、今まで自分でもがいていたすべてを終わりにして休むことになります。真に安らぎがその人のものになるわけです。

今日のこのお話、神のみことばを通して吟味してみましょう。今、自分はキリストによる安息抜きで何かを求めていることではないのか。何を求めているらっしゃるのでしょうか。安息抜きにして、何を求めているらっしゃるのでしょうか。そして、その求めているものがないから、私には安らぎと安息がないと勘違いしていないのかということ吟味してみましょう。何を祈って、何を求めているらっしゃるのでしょうか。それがキリストの安息の上にあるものなのでしょうか。安息などを放っておいて、ないのに何かを求めているのでしょうか。それを偶像と言います。いくら大義名分があったとしても、キリストの代わりになるわけですね。それがないから、人の愛情がないから、お金がないから、健康がないから私は休めないんだと勘違いしているのではないのでしょうか。だから、休むためにそういうことを必死になって求めているのでしょうか。それはキリストが抜けた安息日と一緒になのです。もう終わりにしないといけません。私たちに必要なのは、皆さんが求めているものではなくて、キリストによる安息なのです。安息の中ですべてが新しく始まります。それで、常に条件、環境、状況などを取り上げて云々するより、キリストのいのちを優先しましょう。そこからスタートしないとダメ。そうでないと、安息がないまま条件がどうのこうの、環境がどうのこうの、状況がああだこうだ、いつもそれに振り回されて、使徒1:14のマルコのタラップンの祈りは、私とは遠いものになるのです。そのマルコのタラップンの祈りは、こういうことを全部超えて、キリストによる安息、キリストによるいのちの祝福、それを握って違う祈りを始めたのです。でも、私たちが条件、状況、環境のせいにして、それがああだこうだと思ってる限りは、そこはキリストが抜けていることです。極端に申し上げると、キリストによる安息のある者は、条件、状況、環境がどうなっても構わないのです。どうでもいいのです。ローマの植民地からいつ解放されるのでしょうか。どうでもいいよ。聖霊が臨まれると、あなたがたはキリストによっていのちが得られた、神がともにおられる安息の主人公ではないのか。いま何を言っているのかとおっしゃっているわけです。祈りが変わらないといけません。それでキリストのいのちより先走っているすべての枠を、それがルールであれ伝統であれ、自分が今までいくら大事にしていたものであれ、全部壊さないといけません。キリストのいのちより優先されるものなどはありません。悪魔の作品なのです。いくら大義名分のあるものでも、悪魔の作品なのです。それでまず信者である自分がキリス

トにある真の安息を十分に味わい、真の安息が必要な現場に目を向けて、関心を持って現場のために祈る、そのようなクリスチャンになることを主の御名によってお祈りいたします。

(祈り)

恵み深い父なる神様。神様を離れた人間に、安息、安らぎがないままサタンに騙されて、苦しみの中を歩くしかない私たちのために、神様が一方的な愛をもってメシア、キリストを約束されて、そのキリスト・イエスを通して安息が取り戻される、この福音の祝福を心から感謝申し上げます。悪魔はこのキリストを抜きにして、私たちを騙し、見事な悪魔の作品を作ることとを心に覚えて、その暗闇の勢力が砕かれるようにキリストを握って、そのキリストにあるいのち、安息からすべてを新しく始められる覚悟を決めるようにひとりひとりを祝福してください。それで、安息がないまま、理由もわかっていないまま苦しんでいる現場の人々に、真の安息主キリストをおあかしするクリスチャンになるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。